芭蕉の忍摺・葛城山の句文について

阿部喜三男

上

芭蕉の句文には同種のものでありながら、別案が種々に伝わっているものがある。ことに『奥の細道』中の、

あくれハしのふもち摺の石を尋て忍ふのさとに行遙山陰の小里に石半土に埋てあり里の童部の来って教ける昔ハ此山の上に侍しを往来の人の麦草をあらして此石を試侍をにくみて此谷につき落せハ石の面下さまにふしたりと云さもあるべき事にや

早苗とる手もとや昔しのふ摺　（素龍本）

とある一節について種々別案が伝わっていることは大方の人が御承知と思うが、今これについて考えてみたい。

幸いこゝの句については、

（A）五月乙女にしかた望ん忍摺

（B）早苗つかむ手もとや昔しのぶ摺

（C）早苗とる手もとや昔しのぶ摺

の三案が伝わり、元禄七年清書の右の細道に見える（C）が最後案であり、曽良の書留に見へる（A）が――この中では――最初案と考へられるので、これに附いている文の方もこれによって三段階の進行を考えることが出来る。

それでもなお、これに関する句文は、後世の全集・句集・文集などの、他から拾收したと思われるものを除いても、なか〳〵多く、真蹟といわれるものの類にはなお真偽のほどを考えねばならぬと思われるものがある。しかし、今は万一他筆としても真蹟に基づいた模写とは認められるもの、従来一応は真蹟として認められたものをとりあげ、用字（漢字・仮名・送り仮名など）の異同はともかくとして、文脈や語句の関係から考えて、次の十種類を掲げることにする。

（1）まずA型句を含むもので、前記した如く曽良の『奥の細道随行日記』（小川書房版）中の「俳諧書留」に見えるもの。こゝには「加右衛門△之ニ遣ス」と書込があり、恐らくかの奥の細道にも出てくる仙台の画工加右衛門に芭蕉が書き与えたものの書留であると断定してよく、従ってこれは該旅行当時の文案だったろうと思われる。ちなみにこの句形は『雪丸け』（安永四年刊）や莎青の『奥の細道拾遺』（延享元年刊）の中にも見える。

次に（2）から（7）まではB型句を含む。

（2）『続蕉影余韻』（昭和十四年刊）に菊本氏蔵として写真の載るもの。これと同文のものが『芭蕉翁遺芳』（昭和五年刊）の土居氏蔵とする扇面の写真に見え、それは『俳人真蹟全集・芭蕉』（昭和五年刊）にも『芭蕉翁遺墨集』（昭和十六刊年・川崎氏蔵とする）にも見える。

（3）露泉の『網代笠』（元祿十一年刊）に見えるもの。これと同文のものが千山の『花の雪』（元祿十五年刊）にも載る。露泉は讃岐の僧、千山は姫路の人であるから、両者の基づいたものは同一であったかと思われる。

（4）『芭蕉翁遺芳』に川島氏蔵として写真の載るもの。

（5）大蟻の『翁反故』（天明三年刊）に載るもの。この本は有名な芭蕉偽書簡集であるから、その点からいうとこれも疑わしいが、「片山芹川所持」ということわりがついており、この種の文案は芭蕉が幾種も書き残したものがあったと思われるので、むげに打消してしまうわけにはゆかず、これが基づいた真蹟もあったのかも知れないということになり、一応こゝにとりあげることにする。

（6）『芭蕉翁遺墨集』に金光氏蔵として写真の載るもの。これと同文のものが梨一の『奥の細道菅菰抄附録』（文政十二年小波写）の中に見える。

（7）楚常の『卯辰集』（元祿四年刊）中に見えるもの。

次の三つはC型句を含むものである。

（8）大町の『涼石』（元祿十四年刊）に「石譜」として載せるもの。

（9）『奥の細道』中の一節。（前掲のもの）

（10）史邦の『芭蕉庵小文庫』（元祿九年刊）に見えるもの。これと同文のものが土芳の『蕉翁文集』（岡田利兵衛氏蔵写本）にも載っている。

今この十種を表にして示すと次のようになる。

1	2	3
しのふの郡しのふの摺の石は	もち摺の石は	もち摺の石は
	福しまの駅東一里計	ふくしまの駅東一里はかりに
	山口と云ところに有	山口と云処に有
		さと人のいひへ侍るは伝
	往来の人の麦草をとりてこのいしをぬくひ侍るをにくみて	往来の人の此石を試むと麦草をあらし侍るをにくみて
	此谷に落し入けるとなむ	此谷に落入侍るよし
茅の下に埋れ果て	いまはちかやの下にかくれて	今はちかやの中に埋れて
	石のおもて下さまに見え侍る	石の面は下さまになり侍るとかや
いまは其わさもなかりければ		
風流のむかしおとろふる事本意なくて	風雅のむかしにをとろふるこそほ意なきわさなれ	誠風流のむかしにおとり侍るぞいと本意なく覚侍る

4	5	6	7	8	9	10
もち摺の石は	みちのくふくしまの駅より一里はかり	しのふもち摺の石は	しのふもちすりの石は	福島にやとりて忍の里に石を尋ぬ	しのふの石を尋ねて忍ふのさとに行	忍ぶの郡しのふの里とかや文字すりの名残とて方二間はかりなる石あり
東に有	みちのくふくしまの駅ふくしまの駅ちかきに有		みちのくふくしまの駅ありて		遙山陰の小里に石半土に埋てあり	
さと人のいへる	里人のいへるハ	さと人のいへるは		里の童のおしへていへるへしを	昔は此山の上部の童の来て教へけるを	此石はむかし女のおもひに石になりて其面に文字ありとかや山藍摺みたるゝゆへに恋によせておほくよめり
				むかし此山の上に有を		
ゆきゝのひとの麦草をとりて此石をこゝろみけるをにくみて	往来の人のむき草をとりて此石をこゝろみ侍るをにくみて	往来の人の麦草をとりて此石をこゝろみけるをにくみて	往来の人の麦くさを取てこのいしをこゝろみけるを	往来の人麦草をあらして此石を試るゆへ醜しとて	往来の人麦草をあらくみて此石を試侍をに	
			里人とも心うく思ひて			
此谷に落し侍るよし	この谷に落し入侍るとなん	この谷に落し入て	此谷にまろはし落しぬ	此谷に落すとなり	此谷につき落せは	
				句（こゝに入る）		今は谷合に埋れて
石の面ハ下さまになりて	石のおもては下さまになりて	石の面は下さまにふしたれハ	石の面は下さまにふしたれは	石のおもて下さまにふしたり	石の面下さまにふしたりと云	石の面は下さまになりたれば
いまはさるわさする事もなかりけれハ	いまはさるわさする事もたえたり	いまはさるわさする事もなかりけるとなむ	いまはさるわさする事もなく	さもあるへきにや	さもあるへき事にや	させる風情も見えず侍れども
風雅のむかしにかはれるもいと本意なくて	風雅のむかしにをとろふるなんいと本意なしや	風雅のむかしにかはれるをかなしひて	風雅の昔にかはれるをなけきて			さすがにむかしおほえてなつかしければ

こう並べてみると、さすがに（1）が最も簡素である。だが、位置の説明や里人の麦草の件や現状（下ざま云々）の説明などが入らなかつたのは、執筆の時機や場所や書き与える人が該事実に近かつたという関係も考えられよう。文案がまだ未熟であつたということも無論言えようが。

B型句を含む類になると、（2―7）であるが、位置の説明や里人の麦草の件や石の現状の説明が詳しくなる。それだけ事実との近親性が薄らいだとも考えられる。その中でも結びの部分を見ると、（2・3・4・5）は（1）とも共通して「本意なし」の語が用いられてい、（6・7）と異る。なお見ると（2・3）（4・5）の二組の近似性が考えられまいか。

すなわち、（2・3）は「山口」といふ地名の入る点、「ち

がや」云々の入る点、「さるわざする事」云々の処を欠いている点で共通する。(3)の「さと人」云々は(4・5)に近いが、(4・5)では位置の説明の処で「山口」が無くなり「東」を残している。その他文案はほゞ同じである。

(6・7)では「さと人」云々の入る場所が異るが、位置の説明も、前述した結びの「かなしびて」「なげきて」の処も他のものと異つた類をなしている。

位置の説明では、細部に及んだ程度からいふと、(2・3)(4・5)(6・7)の順になるが、「みちのく」の語を入れて広汎性を考慮したものは(4・5・6)である。前に(1)の処で、事実への近親性が濃いから位置の説明が省かれたのだろうと考えたが、その逆はこゝでは必ずしも通用しない。近親性が薄いほど広汎性が考慮されたとも考えられる。そこでこれら文案はいずれが事実(旅行時)に近いか、すなわち、文案の順はどうかということは、この位置の説明の部分からのみは考えられない。だが、私は上掲の如く並置してみると、(2・3)(4・5)(6・7)の三段階の展開が考えられるように思うが、どうであろうか。(ただし、2と3、4と5、6と7の間の順は考えられない。)

C型句を含む類にあつては(8・9)が近似することは言うまでもない。殆んど「遙山陰……」の有無と句の場所とが異るのみである。これは短篇俳文としての執筆と紀行文の一節としての執筆との相違も考へられるが、文案の前後あるいは熟・未熟という点を考えるには、「遙山陰……」の部分が後から加えられたが、省かれたかと考える点にかゝつて来よう。これについては、私は番号に示した順を考え得ると思うが、これはどうであろうか。

(10)が今までの文案と甚だ異色あることは明らかであろう。これは(1—8)の諸文案の根柢に紀行文(奥の細道)の想定があつて、その上で短篇的に執筆されていたのに対して、(10)はそうした想定から離れた短篇俳文としての文案だつたと考えられると思うが、これはどうであろうか。

組みにくい表など掲げて、何をもた〳〵考えるかと言われてしまえば、それまでゞあるが、奥の細道の文は旅中の短篇的句文を集成整頓したものだといふ説(勝峰晋風氏『奥の細道創見』等)もあり、今私の考えている所はその説の一助ともなろう。すなわち、(1—8)の執筆が(9)に吸収されて行つているのであろう。また、芭蕉の短篇俳文集が編まれるとすれば、この文案群の中からは(10)が代表的なものとして採り上げられるべきことも言えるであろう。

なお、こんなに文案の種々を残しながら、芭蕉は、支考が芭蕉の文に手を加えた時によく気にした「かくて」「さるは」「その」「そこに」等の連繋辞や照応語句をあまり気にしなかつたことも考えられよう。(これについては『国語と国文学』昭

和二十八年十一月号掲載の拙文を御参照下されば幸甚)。また、この諸文案の結びの部分で、「風流」「風雅」の語が同義的に用いられていること。あるいは「風雅のむかしにおとろふる事」が歎かれるが、「いまはさるわざ……」の部分が(4・5・6・7)で復活して強調され、(6・7)では更に「本意なし」より積極的なと思われる語にまで進むが、それが(8・9)ではすつかり文字の裏に沈潜させられてしまう。(10)では「……なつかしければ」という穏かな文字となる。芭蕉の俳文の含蓄味ということを考える一資料にもなるであろう。

下

なお、もう一つついでに感想を述べさせていたゞく。それは葛城山に関する芭蕉の句文で、文末に、

なほ見たし花に明け行く神の顔

の句を含む俳文である。これについては、極く短い前書類を除いて、次の五種の文案があつたかと思われる。

(1) 風国の『泊船集』(元禄十一年刊)に載るもの。これと殆んど同文のものが土芳の『蕉翁句集』(岡田利兵衛氏蔵写本)に見える。

(2) 風陽・兎什共撰の『先手後手集』(明和四年刊)に見えるもの。

(3)『蕉影余韻』に写真が載る真蹟。『芭蕉翁遺墨集』にも載ってい、現在は紫羊文庫蔵の真蹟。

(4) 山崎喜好氏蔵写本『祖翁消息写』に見えるもの。この写本は寛政享和頃、筆者は暁台門の人かと思われるもの。この句文は切れた所(のち□で示す)があるまゝに写し取つて

1	2	3	4	5
やまとの国を行脚して	大和国を行脚して	やよひのすゑにゝ行脚して	やよひのはつかあかまり□	
葛城山の麓を過るに	かつらき山の麓を通るに	やまとのくかつらき山のふもとを過るに	□くにに行脚して	
よもの花はさかりにて	四方の花は盛に咲て	よもの花はさかりにて	□のふもとを過るに	かつらき山のふもとを過るに
峰〳〵はかすみわたりたる明ぼののけしき	岑〳〵の霞に似たる有明の月も	みね〳〵は霞(マヽ)わり(か)て[かゝ]りて	よもの山□もさかりにて	よもの花はさかりに咲て
いとゝ艷なるに	いとゝ哀なりきに(マヽ)	いとゝなつかしけなりけれは	おかしき□ほの一しほなつかし□	みね〳〵は霞わたれる空のけしき
彼の神のみかたちあしゝと	かの美目わるきといゝけん神の御かたち		〳〵空うち霞〳〵有□月も	
人の口さかなく(蕉翁句集・さかしく)	いかなる人のわるき口にや			
世にいひ伝へ侍れは	なき名といふかしくおもひ疑ひて			

いるものである。

（5）勝峰晋風氏の『新編芭蕉一代集』に紹介されている『深川よどみ集』中に見えるもの。

今これを表示すれば、右の如くになる。

こう並べてみると、詳しく書いたといふ点から言えば、一目で（2・1・4・3・5）の順がわかり、（1・2）と（3・4・5）との二群があるとわかる。しかし、文案の順は必ずしも短から長へと考えるわけには行かず、長から短へ含蓄味の深いものとして推敲される場合があることが、前条の忍摺の句文を参考にしても、考えられなければならない。

この句は『笈の小文』には前書「葛城山」とのみあり、『猿蓑』にもあつて、かなり自信のあつた句と思われるが、そこでも前書は「葛城山のふもとを過る」とあるのみ、『四季千句』『信夫摺』『陸奥衞』にも採られているが、やはり前書は猿蓑程度に過ぎない。

思うに、この句の前文は、案じてみたが満足出来なかつたのではないか。さらに思うに、はじめは（1・2）の類に案じたが、圧縮の（3・4・5）の類の方に進み、それでも満足のゆくものが出来ず、前記程度の前書として諸書に発表するようになつたのではあるまいか。されば、この句のあらわれ方にはやゝ無理があつて、句解にも種々なものが出てくるのではあるまいか。

この句が一言主の伝説や拾遺集の左近の歌を考えていての吟詠であるということは諸書に略々共通して説かれているが、句解には、葛城山の春暁に醜いといわれる神の顔がみたいという程度に説かれるものがかなり多い。あるいは、伝説の醜いということはそまゝ肯定しながら、この美景中でみたら美しいかも知れないと説くなど、その他がある。しかし、有力な説は醜いという伝説は間違いで恐らく美しいのだらう、その神の顔が見たいというように説く（幸田博士・志田博士・頴原博士・大藪氏・楸邨氏等）説である。この説に最も有力な根拠を提供するものは、上掲文案中の（2）である。

（2）を載せる『先手後手集』はその両撰者が江戸に旅し、白兎園（二世宗瑞）の処で寓目したものとして、この句文の外、（イ）「山中や菊は手折らじ湯の匂ひ」の句文。（ロ）「五月雨や色紙へぎたる壁の跡」の句文。（ハ）「めでたき人の数にもいらむ老の暮」の句文とをあげている。右の中で（イ）は現存の真蹟と照合し得て所伝の正確なことがわかるが、他のものはそれほどの傍証を得ない。たゞ（ハ）は茅集や陸奥衞中に、この葛城山のは（1）のような類似のものがある。

こゝの右のような句解をするのには、必ずしも（2）を要せず、（1）だけからでも可能なのであるが、もし（1・2）が無く、（3・4・5）類のみが伝えられたとしたら、なお、その類も無く、猿蓑の前書程度のものゝみで伝えられたとした

（一〇頁下段へつゞく）